

真武神の圖像の新資料

——北京大學圖書館所藏の拓本を中心に——

酒井 規史

一、前言

筆者は、北京大學に留學中、北京大學圖書館が所藏する拓本の調査を行った。その際に、真武神に関する拓本を窺見する機会を得たので、その調査報告をしたい。調査したのは南宋時代の石碑の拓本で、いずれも真武神の絵が描かれている。真武神の圖像について、新たな資料を提供しうるものであろう(1)。

また、碑文と関連する史料を紹介し、拓本のもととなった石碑が立てられた状況を明らかにしてみたい。そのことで、南宋時代における真武神に対する信仰の一端が明らかになるであろう(2)。

なお、本文の後に拓本の写真と碑文を掲げておいたので、適宜参照されたい。

二、拓本の調査報告

(一) 今回、筆者が調査した拓本は、北京大学図書館が所蔵する芸風堂コレクション(繆荃孫氏の旧所蔵)と柳風堂コレクション(張仁蠡氏の旧所蔵)のものである。この二つのコレクションは、陳垣・陳智超・曾慶瑛氏が『道家金石略』(文物出版社、一九八八年六月)を編纂する際に利用したものである(3)。このたび調査した拓本も同書に著録されているが、残念ながら圖像が省略されている。今回の調査は、『道家金石略』を補正する試みでもある。

(二) まず、拓本の書誌的情報と保存状態を以下に述べる(4)。拓本の名称については『道家金石略』に準ずることとする。なお、以下に「整理番号」としているのは、北京大学図書館による拓本の整理番号である。

・「真武聖像題記」(以下、〈拓本1〉と略称する)

『八瓊室金石補正』卷一一四と『道家金石略』(三六三頁)、『巴蜀道教碑文集成』(四川大学出版社、一九九七年十二月、一二九頁)に著録されている。

北京大学図書館の目録では「真武聖像」とされている。北京大学図書館には、拓本が三つ所蔵されているが、筆者が実見できたのは二つ。ひとつめの拓本(整理番号:24119)は青い墨でとられた拓本であり、写真撮影をしたのはこちらの方である。拓本は二つとも保存状態はよく、真武神の圖像も鮮明であった。いずれも、縦の長さが一メートル七十センチ強ある大きな拓本である。

【図1】は〈拓本1〉の写真である。画像の紹介を優先するため、拓本の縁の部分はカットしてある。なお、掲載した写真では分かりにくいのが、碑文は真武神の足下にあり、左右に分けて記されている。

・「大雄真聖像」（以下、〈拓本2〉と略称する）

『金石苑』巻六と『道家金石略』（三三七頁）、『巴蜀道教碑文集』（一五五頁）に著録されている。『金石苑』には、真武神の画像もトレースして著録されており、調査の際にも参考にした。

北京大学図書館の目録では「大雄真武像」とされている（整理番号：24326）。拓本の状態は良好とはいえず、残念ながら真武神の画像にも明瞭ではない箇所がある。

【図2】は〈拓本2〉の写真であるが、実際にはこの画像の下に碑文が記されている。二メートル以上の大きさがある拓本であり、撮影設備の関係上、拓本全体を一枚の写真におさめることが出来なかった。全体像は『金石苑』に所載の〈拓本2〉のトレース画を参照していただきたい。なお、【図2】でも画像の紹介を優先するため、拓本の縁の部分はカットしてある。

・「鹽官鎮重修真武殿記」（以下、〈拓本3〉と略称する）

『隴右金石録』と『道家金石略』（三六三頁）に著録されている。

北京大学は二種類の拓本を所蔵している。ひとつめの拓本（整理番号：24126a）は、写真撮影をしたものである。もう一つ（整理番号：33519）は、拓本を切り張りして法帖の形式に装丁しており、縦七文字の四行

を半葉におさめる（一葉は五十六字）。前者の拓本の左端は破損しているが、後者の拓本と『隴右金石録』によつて欠けている部分を補うことができる（以下に詳述する）。

【図9】は（拓本3）の全体像である。拓本の縦の長さはおよそ95センチ。【図10】は（拓本3）の真武神の画像である。碑額に位置しており、縦の長さは23センチほどである。

（三）今回、調査をおこなつた真武神の画像について以下に述べる。便宜上、（拓本1）と（拓本2）の画像については、まとめて記述する。

（拓本1）と（拓本2）の真武神の画像を対照すると、同じ意匠のもとに描かれたものだということがわかる（【図1】と【図2】を参照）。披髪に裸足で剣を持ち、足元に亀と蛇を踏んでいるという典型的な真武神の姿が描かれており、勇猛な真武神のイメージをうまく表現した画像といえるであろう。後掲の写真では見づらいが、真武神の大きさに比べると足元の亀蛇が少し小さい。剣を握る真武神の手が印を結んでいるのも特徴的である（【図3】と【図4】を参照）。

（拓本2）の状態が悪いので厳密な測定はできなかったが、両者の各部分について測定してみた結果からも、両者が同じ由来をもつ画像であることが裏付けられる。参考までに、測定した結果を以下に記しておく。

頭頂部から袴のすその部分（足首の上）までの長さ・・・約一三三センチ。
腰（ベルトを基準にする）の部分・・・約四七〜四八センチ。

手の部分（左手の小指の先から右手の小指まで）・・・約二五センチ。

また、真武神の服の文様を比較しても、同じデザインにもとづいている箇所がある。特に、真武神の上衣の左裾に描かれている四つの文様、その上部の甲冑を比較すると分かりやすいであろう（【図5】と【図6】を参照）。

しかしながら、仔細に見ると、この二つの真武神の図像には異なっている箇所が見受けられる。以下に主な内容を列挙する。

第一に、頭部が大きく異なっている（【図7】と【図8】を参照）。（拓本1）の真武神の目は丸く、大きく目を見開いているように見えるのに対し、（拓本2）の真武神の目は少し細い印象を受ける。（拓本2）の保存状態が悪いので、『金石苑』に著録されている（拓本2）のトレースを参照してみても、両者の目の部分の印象は異なる。さらに、（拓本1）と（拓本2）では、衣装の襟の部分が大きく違う。ただ、以上のように相違点があるものの、鼻と唇の部分については、両者の表現は似ている。とりわけ、唇の端の部分に表現されているシワは特徴的である。

第二に、衣装の紋様のデザインと数が異なっている（【図1】と【図2】を参照）。まずデザインについて述べると、掲載した写真では分かりづらいが、（拓本1）の紋様は鳳凰、（拓本2）の紋様は龍をあしらっている点に違いがある。紋様がある場所と数の違いについては、真武神の左手を見ると分かりやすいであろう。（拓本1）では肩と肘、それにくわえて二の腕と胸のあたりに一箇所、さらに肘と手首の間に一箇所、

紋様がある。(拓本2)では、肩と肘に紋様があるだけである。

第三に、衣装のシワの表現が異なっている(【図1】と【図2】を参照)。概して、(拓本1)の方がシワの数が多く、(拓本2)の方が簡素な印象を受ける。これも真武神の左腕の部分と比較すると、その違いが分かりやすいであろう。

第四に、衣装の多さが異なっている(【図1】と【図2】を参照)。(拓本2)では、真武神の上衣の左右の裾の間(剣の柄の右斜め下の部分)から、下に着ている服が見えるが、(拓本1)には存在しない。

以上、(拓本1)と(拓本2)の真武神の画像について、共通点と相違点を述べた。では、この両者の関係はいかなるものであろうか。まずは碑文をもとに考察してみたい。

(拓本1)の碑文には、以下のように記されている。

聖像在撫州祥符觀殿壁、邦人言國初時畫、然不知何人筆也。…(中略)…今得模本、立于龍州玉虛觀。

これによれば、もともとこの真武神の画像は、撫州の祥符觀の壁画であった。その模本をもとにして、龍州の玉虚觀に真武神の画像が刻まれた石碑が立てられたという。現在の地名でいえば、江西省から四川省まで同じ画像が伝播していたことになる。

残念ながら、(拓本2)の碑文は破損した箇所が多く、判読は難しい。よって、碑文から画像についての情報を得ることは困難である。文中に「墨本」と見え、この真武神の画像の模本を指している可能性があるが、断定はできない。

（拓本1）の碑文によれば、二つの拓本にえがかれている真武神の画像の来歴は明確である。同じ壁画からとった模本をもとに、二つの真武神の画像が作成されたと考えれば、両者が同じ意匠でえがかれていることになら不思議はない。この二つの拓本からは、南宋時代、少なくとも三箇所、同じ由来をもつ真武神の画像が存在していたことが分かる。当時の画像の伝播という観点から見ても、この二つの拓本は興味深い資料といえるであろう。

しかしながら、上記のように、両者の画像には相違点も見出される。現段階では、筆者には両者の違いがなぜ生じたのかは分からない。（拓本1）のもとになった石碑は乾道六年（一一七〇）、（拓本2）のもととなった石碑は嘉定二年（一二〇九）に作成されており、およそ四十年ほど年代の差がある。模本が伝承される間に、変化が生じたと考えられることもできる。衣装の細部についてのちがいについては、それで説明できるかもしれない。しかし、真武神の画像の顔の部分、およびの襟の部分については、両者の相違は明確である。筆者には、時代の先行する（拓本1）の方が、顔および襟の部分とその他の部分に統一感がないように感じられる。拓本は清代にとられたものであり、原碑に後世の手が入っている可能性もあるが、筆者は原碑の状況を確認していないので、この問題についてはここまでにしたい。

（四）最後に、（拓本3）の真武神の画像について述べる（**図10**）を参照。（拓本3）の真武神の画像も、典型的な真武神のイメージにもとづいており、南宋時代には真武神のイメージが定着していたことがうかがえる。ただし、（拓本1）と（拓本2）に比べて画幅が小さいこともあり、画像は素朴なものである。真武

神は岩に座っており、足元の龜蛇はかなり小さく、左足で踏みつけているように見える。なお、『夷堅支景』卷第三の「海中真武」には、以下のような真武神の絵画の記載がある。

畫真武仗劍坐石上、一神將甚雄猛、持斧拱立於傍、後書「道子」兩字、疑爲吳生筆。

これを見ると、真武神が石の上に坐っているとあるので、〈拓本3〉の真武神の圖像に近いものだったようである。ちなみに、北宋・元符二年（一一〇九九）作の「元始天尊說北方真武妙經」の碑刻にも真武神の圖像が描かれており、それも岩に座った真武神の圖像である（5）。

三、碑文についての関連史料

以下、各碑文に關係する史料を紹介し、石碑が立てられた当時の状況を復元してみたい。

（一）〈拓本1〉

上述のように、〈拓本1〉の原碑は、乾道六年（一一七〇）、撫州の祥符觀にあった壁画の模本をもとに、龍州の玉虚觀に立てられたものである（6）。

碑文によれば、

聖像在撫州祥符觀殿壁，邦人言國初時畫，然不知何人筆也。…（中略）…經二百年，壁無少損，則知有物護持之矣。

とあり、この真武神の壁画は、宋の建国当初から撫州祥符觀に存在したという伝承があったらしい。な

お、北宋時代の撫州祥符觀については、王安石が「撫州祥符觀三清殿記」(『臨川集』卷八十三)という文を残しているが、真武神の壁画については記載がない。

原碑の立てられた龍州玉虚觀については、碑文の年代に近い史料が存在する。乾道年間に記された郭郊「玉虚觀賜書記」(『宋代蜀文輯存』卷五十)である(7)。これにより、当時の龍州玉虚觀の様子を知ることが出来る。龍州玉虚觀は、高宗が臨模した「晋唐人の書帖」と『黄庭経』を下賜されたこともあり、龍州を代表する道觀だったようである。また、以下のような記述もある。

觀有玉皇・三元殿、嚴潔靜深、壁畫頗工。皆若闕之所宣力也。

高宗の御書を保管していたということ、観内の玉皇殿や三元殿の「壁畫は頗る工(たくみ)」であったという記述からすると、この道觀と美術の関係は深いようである。(拓本1)の原碑が建てられるようになったのもうなずけよう。

また、(拓本1)の碑文は、文人官僚が赴任地の道教信仰と関わっていたことを示す資料でもある。原碑を立てた史祁なる人物の詳しい経歴は不明であるが(8)、碑文によると史祁の官職名は「右朝散郎・知龍州軍州・主管學事・兼管内勸農事・兼管界沿邊巡檢使」となっており、正七位の文官であり、玉虚觀のある龍州の知州であったことが分かる(9)。また、乾道七年(一一七一)に書かれた「李龍遷祠記」(嘉慶『四川通志』卷三十六)によれば、龍州で信仰されてきた李龍遷の祠廟の再建にも取り組んだという。史祁は在地の信仰を集める道觀や祠廟に積極的に関与していたようである。

(二) (拓本2)

上述したように、碑文の欠損がひどく、内容の読解は難しいが、判読できる箇所に関係する史料を紹介する。

まず、(拓本2)の原碑が立てられた場所について考えてみたい。碑文の末尾、年号と日付のあとに、「潼川府□江縣」とあり、碑文の作成地だと思われる。南宋の時期、この地名に該当するのは潼川府路の潼川府中江県である。

清代の羅振玉の『金石苑』によれば、この拓本のもととなった石碑は「中江縣東南元武山大雄寺」にあるとされる(なお、「元武山」は清代の避諱によるもので、「玄武山」が正しい)。現在も、四川省の中江県にある玄武山大雄寺に、拓本のもとになった石碑が立っているという(10)。以上のことから、原碑が立てられたのは、中江県の玄武山であると確認できる。

この玄武山は、宋代の地理書には「大雄山」とも記述されている。南宋の地理書『輿地紀勝』巻第一百五十四「潼川府」には以下のようにある。

大雄山。在中江。有真武祠。水之石多産出龜蛇形。

同じような記述は、南宋・劉光祖の「大雄寺記」(『宋代蜀文輯存』巻七十)にも見受けられる。

玄武山名在邑之東、上應虛危之宿、結爲二氣之形。山下有淵、産文石、其文隱隱若龜蛇然、因以名其邑、又以名其江。其旁亞松山有真武將軍廟、廟毀徙乾昌。

これらの記述によれば、この山の一帶では亀蛇を思わせる紋様のある石を産するという。玄武山（「大雄寺記」によれば、元々は傍らの亞松山）に、真武を祀る祠廟（前者の「真武祠」、後者の「真武將軍廟」）が立てられたのは、当地の石の紋様が四靈のひとつである玄武を連想させ、玄武とゆかりの深い真武神を祀るようになったからであろう（11）。

「大雄寺記」によれば、玄武山（大雄山）は、仏教と道教が代わる代わる勢力をもっていた場所のようである。その沿革を記すと、以下のようになる。唐代の乾元二年（七五九）に乾昌寺が建てられ、その後、治平二年（一〇六五）、大雄寺と改称された。大観年間（一一〇七〜一一一〇）に、林靈素が仏教を弾圧し、真靈観という道観にかわる。その後、建炎年間（一一二七〜一一三〇）、また仏寺にもどされた。その後、仏僧が不在となり、紹熙四年（一一九三）に道士が占拠しようとしたが、仏寺のままにするという沙汰が下ったという。

碑文の末尾、碑文を撰した人物の名前が記されているとおぼしき部分（碑文の「嘉定己巳」以降の部分）に「比丘」という肩書きが見えているのは、石碑が建てられた時代には、玄武山（大雄山）は仏教の支配化にあったからであろう。原碑を立てた「住山祖淵」なる人物も仏僧と思われる。仏寺に真武神の石碑を立てた理由については、碑文の欠損がはげしいために不明である。しかし、玄武山（大雄山）が仏教の支配下にあっても、当地の真武神に対する信仰が根強く残っていたと察せられる。

まず、この石碑を立てた人物の一人、王光祖について述べたい。その詳しい経歴は不明であるが、官職名は分かるので参考になるであろう。上述したように、北京大学図書館には（拓本3）は二つ収蔵されており、そのうち一つ（整理番号：24126a）は、王光祖の役職名が記されている箇所が破損してしまっている。そこで、もう一つの拓本（整理番号：B3519）と『隴右金石録』によって官職名を補正すると、以下のようななる（12）。

武功大夫・興州駐劄御前右軍統制軍馬・知西和州軍州・兼管内勸農事・沿邊都巡檢使・彈壓軍馬

この官職名から、王光祖は正七品の武官であり、西和州の知州であったことが分かる。（拓本1）の碑文に見える史祁と同じく知州であり、実際の職務をあらわす差遣の肩書きも共通している部分がある（管内勸農事、沿邊都巡檢使）。

この王光祖の任地である西和州（この石碑が立てられた鹽官鎮もその領域の中にある）はどのような場所であったのだろうか。『宋史』卷八十九・志第四十二・地理五には以下のように沿革が記されている。

西和州、下、和政郡、團練。本隸秦鳳路。紹興元年、入于金、改祐州。舊名岷州。十二年、與金人和。以岷犯金太祖嫌名、改西和州、因郡名和政云。以淮西有和州、故加西字。開禧二年、又入于金。

これにより、西和州は、時期によって南宋に属したり、金に属したりしていたことがわかる。つまり、南宋と金の国境線地帯だったのである。碑文が書かれた乾道八年（一一七二）には、西和州は南宋の領域に属していたが、碑文に、

中前敵人叛盟、意欲長驅而下蜀、至此而爲官軍所敗、寧知非陰護之所致耶。

とあるように、領土の境界を定めたあと、「敵人」（Ⅱ金軍）が盟約に叛いて攻撃をしかけてきたらしい（13）。

その国境の紛争地帯に真武殿が作られた理由は、碑文の中で記されている。

予（Ⅱ王光祖）于乾道乙酉歲捍御敵人至此、而井邑已皆焚蕩、惟于灰燼中瞻見眞君容像、巍然而坐。

所飾丹青不変而鮮絜、所披之髮不壞而具存、強龜蛇之形狀亦無所損。予欽仰其靈、已有重修之意、恨力無及。

乾道元年（一一六五）に、王光祖が敵をふせぐために鹽官鎮にたどりついたところ、灰燼の中に真武神の像だけが無事に残っていたという。王光祖は、それを真武神の靈威と感じ、真武神の像を祀る為の真武殿を再建を志したという。以下、碑文では、鹽官鎮の人々が貧富を問わず協力をして、真武殿を再建する様子が語られている。なお、碑文の中では特にふれられてはいないが、実際に復興の中心となったのは、碑文の後に「縁化主」と記されている魏奎なる人物だったと思われる。

なお、この真武殿の再建については、当地の道士も関与していたようである。碑文の後ろには四人の道士の名前が記されている（14）。二人は鞏州天慶觀の道士であり（授業道士王致修と小師嚴居厚）、真武殿の再建には、天慶觀の援助もあったのではないかと推測されよう（15）。また、「雲水道人」員居顯、李冲和という二人の人物の名前が記されている。この「雲水道人」が何を指すのかは分からないが、流浪しながら修行をする道士なのではないかと思われる（16）。

〈拓本3〉の碑文からは、官僚と道士、さらには当地の民衆が協力して真武殿を作った様子がしのばれる

る。南宋と金の紛争地帯における、真武神の信仰の様相を今に伝える貴重な史料といえるであろう(17)。

四、結語

以上、北京大学所蔵の拓本にみえる、真武神の画像の新資料を紹介した。さらに、碑文および関連する史料から、拓本のもととなった石碑の作られた状況を復元した。筆者の現在の知識では不明な箇所もあったが、それらは今後の課題としたい。

注

- (1) 宋代の真武神の画像については、津田徹英「寺社縁起と美術 中世千葉氏による道教の真武神画像の受容と『源平闘諍録』の妙見説話」(『国文学 解釈と鑑賞』第六十三巻十二号、一九九八年十二月。改題のうえ、加藤実編『千葉氏の研究』に再録。名著出版、二〇〇〇年五月)と肖海明『真武画像研究』(文物出版社、二〇〇七年六月)を参照。また、歴代の真武神に関する画像については、Stephen Little with Shawn Eichman, *Taoism and the Arts of China*. Arts Institute of Chicago in association with University of California Press, 2000 の第三章第三節“Zhenwu, the Perfected Warrior”; と肖氏の著書を参照。
- (2) 宋代の真武神に対する信仰については、唐代劍「論真武神在宋代的塑造與流傳」(『中国文化研究』

二〇〇〇年秋之巻」と莊宏誼「宋代玄天上帝信仰的流傳與祭奉儀式」（四川大学宗教研究所編『道教神仙信仰研究』所収。中華道統出版社、二〇〇〇年十月）を参照。

(3) 『道家金石略』の編纂過程については、陳智超氏の「校補前言」を参照。また、『道家金石略』の資料的性格については、森田憲司「陳垣編、陳智超・曾慶瑛校補『道家金石略』」（『奈良史学』第七号、一九八九年十二月）を参照。

ちなみに、現在、北京大学図書館は所蔵している古籍を整理し、『北京大学数字図書館古文献資源庫』というデータベースを作成し、古籍の目録と一部の古籍の写真を公開している (<http://rbdl.calis.edu.cn/index.jsp>)。これにより、図書館所蔵の古籍の検索が簡便になっており、拓本の閲覧の際には筆者もその恩恵をうけている。

(4) 北京大学図書館では、拓本を虫除け紙のついた封筒に入れて保存しており、封筒には元々のコレクションの名前が記されている。今回、筆者は調査の際、各拓本が芸風堂と柳風堂のどちらのものであるのかメモするのを忘れてしまい、重要な書誌情報が欠けてしまうことになってしまった。後日、機会があれば再調査を行いたい。

なお、芸風堂コレクションの目録である『芸風堂金石文字目』巻十二には、〈拓本1〉が「真武聖像」、〈拓本2〉が「大雄真武像」として著録されている。また、『道家金石略』の録文は、〈拓本1〉は柳風堂、〈拓本2〉は芸風堂、〈拓本3〉が芸風堂の拓本をもとにしたものと記されている。

(5) 「元始天尊説北方真武妙経」の拓本の写真は、北京図書館金石組編『中国歴代石刻拓本匯編』第四十

一冊（中州古籍出版社、一九九〇年二月）で見ることが出来る。なお、原碑は嵩陽書院の碑廊に現存しており、筆者も実見した。

また、中国国家図書館のサイト中の「碑帖菁華」(<http://res2.nlc.gov.cn:9080/ros/index.htm>)では、中国国家図書館が所蔵する拓本のデータベースを公開している。「元始天尊說北方真武妙經」の拓本も「真武經」のタイトルでデータが公開されており、拓本の写真も見ることが出来る。

(6) 『八瓊室金石補正』によると、原碑は「平武」（四川省平武県。旧龍州の領域）にあったというが、現在の状況は不明である。

(7) 文中に「今上皇帝、改元乾道」とある。

(8) 清代の『四川通志』（嘉慶二十一年）には、史祁について以下のように記されている。

・ 乾道七年、知龍州。重修學校、尤多題詠。（卷百十三）
・ 眉山人。沿江築隄、以禦水患、號史公隄。又修城垣、保証攸頼。（卷百五十）

現時点では、これらの記述の原史料が不明なので、後日に改めて検討したい

(9) 「李龍遷祠記」では、史祁の官職名は、「奉開右朝請郎・知龍州軍・主管學事・兼管内勸農事・兼管界沿邊巡檢使」となっている。なお、宋代の官位については、龔延明『宋代官制辞典』（中華書局、一九九七年）を参照した。

(10) 『中江県志』（四川人民出版社、一九九四年三月）による。

(11) 真武神（およびその後身である玄天上帝）が玄武を源流とすることについては、許道齡「玄武之起源

及其蛻変」(『史学集刊』第五期、一九四七年十二月)などを参照。

なお、『玄天上帝啓聖録』(HY九五七)巻一「降魔洞陰」(十二b、十三a)では、玄武山(大雄山)は「武曲山」とされており、玄天上帝が、六天の魔王が変化した亀と蛇を足下に攝した場所であるという伝説が記されている。

(12) 『道家金石略』の録文では、この役職名の途中が欠けてしまっている。

(13) 碑文の書かれた八年前、隆興二年(一一六四)に、南宋と金の間には和議が成立していた。しかし、本文で以下に述べるように、碑文からは、和義が成立した後も南宋軍と金軍の間に戦闘が行われていたことがうかがえる。なお、「隆興の和議」当時の政治状況については、寺地遵『南宋初期政治史研究』(溪水社、一九八八年二月)を参照。

(14) 『隴右金石録』では、道士たちの名前は著録されていない。

(15) 天慶観は、真宗時代に全国に作られた道観である。『宋会要輯稿』禮五「天慶観」の条、唐代劍『宋代道教管理制度研究』(綏装書局、二〇〇三年八月)の上編・第二章を参照。

(16) 『玄天上帝啓聖録』巻七「高聖降凡」には、「至初六日、須有十方雲水道人競來本宮(『上清玉華宮』赴(二一b))という記述がある。これは道教の儀礼の挙行日にあわせて「十方雲水道人」が道観に集まってくるという箇所なので、道士をさすと思われる。

(17) 『礼県志』(陝西人民出版社、一九九九年五月)によると、甘肅省礼県塩官鎮には、現在も原碑が残っているという。

※今回の調査では、北京大学図書館善本室に拓本の撮影を許可していただき、柏倉伸哉氏（調査を行った二〇〇七年四月当時、北京大学高級進級生）に拓本の撮影にご協力いただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。

〔付記〕 本稿は、二〇〇七年五月、西安美術学院で開催された「中国首届道教美術史国際研討会」で発表した内容に加筆修正したものである。

【図版】

以下、本稿でふれた拓本の写真を掲載する。発表媒体の制約上、写真の印刷が不鮮明な箇所があることをご了承されたい。

本文中でも述べたように、〈拓本1〉と〈拓本2〉に関しては、拓本の全体像を掲載していない。

【図1】 拓本1の真武神の図像



【図2】 拓本2の真武神の圖像



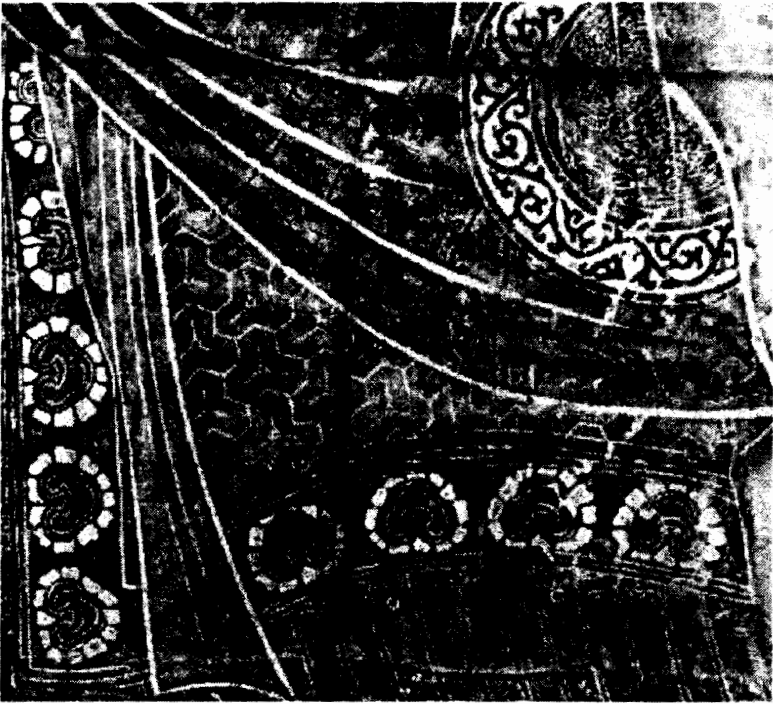
【図3】 拓本1の真武神の手



【図4】 拓本2の真武神の手



【図5】 拓本1の真武神の上衣



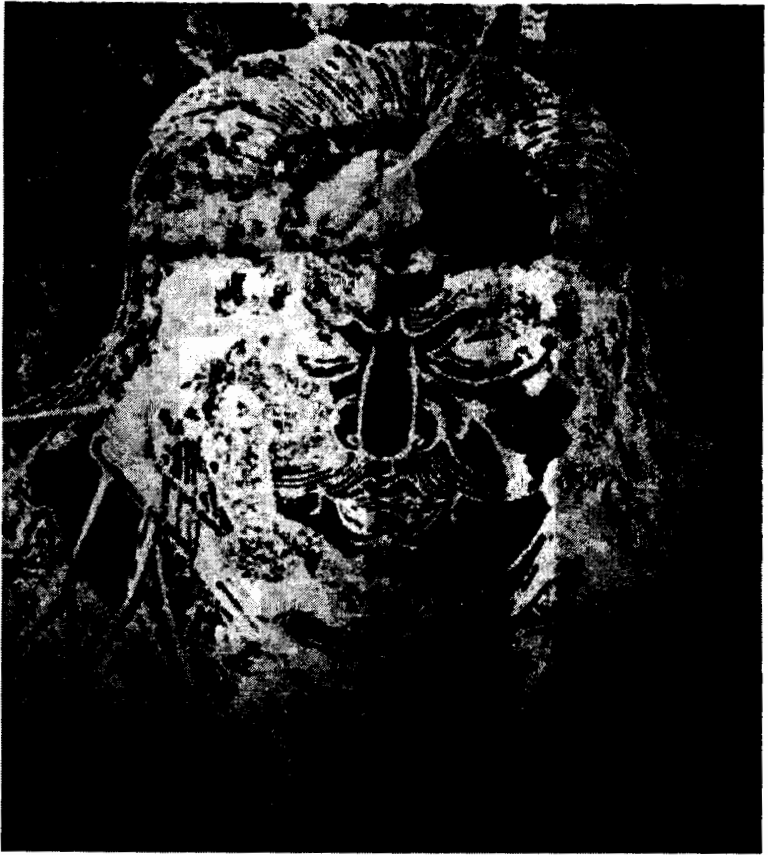
【圖6】拓本2の真武神の上衣



〔図7〕 拓本1の真武神の頭部



【図8】 拓本2の真武神の頭部



【図9】拓本3の全体像



重修真武殿功畢大王王谷先祖字景先諸下
 客米居統子於乾道元自歲稱樂歌人至此而井
 邑日皆焚惟於原墟中瞻見
 真君容像宛然而坐所飾均青翠變而對翠所披之
 袂不壞而共存雖龜蛇之狀亦無所損予共仰其
 靈已有重修之慮然力無從通外存矣
 二弟人服之不
 自獻政富者以此貧者以力不日而成予可作記居
 純辭之不復言曰嘗聞明有禮樂幽有七神故予產
 論臺船之予仲兒詳王芒之守以祥而稱者五事
 牧野之野以無而言者二龍流夏庭之禁則之格
 理存言像之際而况
 其君乃金剛應化之身容像之所存其顯
 所此學知非自裝之所致亦敢不敬書
 乾道八年七月望日
 同谷米居 題記



【図10】 拓本3の真武神の図像

重修真武殿記
 聖廟重修真武殿功畢太子王公先祖字景先謂下
 家本居統子於乾道元歲得樂歌人至此而井
 邑日皆焚燬唯於灰燼中瞻見
 其君容像巍然而坐所飾皆青不壞而鮮潔所披之
 綵不壞而其存雖龜蛇之狀亦無所損予與仰其
 靈已有重修之意恨力無久通到存交此
 工有八區之不一而集處者未滿者及
 自獻者者以財資者以力不日而成亦可作記居
 純辭不復言曰嘗聞明有禮樂幽有鬼神故子產
 論禮樂之事仲尼詩王聖之守以祥而稱者五車
 收野之誓以共而言者二龍流夏庭之祭神之格
 理存言像之深而况
 其君乃舍闕應化之身容像之所在宜其顯靈之若
 所敬者知非洽護之所致耶敢不敬書
 乾道八年十月望日
 同谷米居 記

【図11】 拓本3の碑文

【碑文】

以下、碑文の録文を記しておく。改行などの体裁はなるべく拓本の状況を復元するようにしてある。フォントの大きさが実際の碑文の大きさを反映しているわけではないのに注意されたい。また、フォントの関係で、元の字形に忠実ではない場合もあるのをご了承いただきたい。

〔拓本1〕「真武聖像題記」

(画像の右下)

聖像在撫州祥符觀殿壁邦人
言 國初時晝然不知何人筆
也再拜已瞻英烈言言而筆勢
有若神運恐非世工所可到經
二百年壁無少損則知有物護
持之矣今得模本立于龍州玉
虛觀

(画像の左下)

有宋乾道六年歲次庚寅三月
朔旦壬子二十五日丙子右朝
散郎知龍州軍州主管學事兼
管内勸農事兼管界沿邊都巡
檢使借紫眉山史祁立石

〔拓本2〕「大雄真聖像」

(図像の下)

按道藏北方玄天□
儀相佩服紀□□□
之盡師臆□□□□
教興武江大□□□□
字蜀稱□□□□□□
□□顯著□□□□□□
非月□□擬數□□□□
□□□□□□□□□□
觀偶壁門有是墨本
詢所從來老黃冠云
人得於関表推貨□□
以施其先師人□□□□
(右下に続く)

□□原久□□□□□□
法簡□□□□□□□□
以付住山祖淵令□□
以補專中□□於□□□
傳嘉定己巳□□秋□□
郎潼川府□□江縣□□
川楊□□□□□□□□
掃洒長講比丘□□□□

(図像の右)

己巳嘉定中秋

(図像の左)

住山祖淵立石

鹽官鎮重修真武殿記

鹽官重修真武殿功畢太守王公光祖字景先謂下
客米居純曰予於乾道乙酉歲捍禦敵人至此而井
邑已皆焚盪惟於灰燼中瞻見

眞君容像巍然而坐所飾丹青不變而鮮絜所披之
髮不壞而具存雖龜蛇之形狀亦無所損予欽仰其
靈已有重修之意恨力無及適剖符來此即計度鳩
工邦人聞之不約而集虞者木陶者瓦工自獻技匠
自獻巧富者以財貧者以力不日而成子可作記居

純辭之不獲言曰嘗聞明有禮樂幽有鬼神故子產
論臺駘之事仲尼詳汪芒之守以祥而稱者五車踐
牧野之雪以異而言者二龍流夏庭之燦神之格思
理存言像之際而況

眞君乃金闕應化之身容像之所在宜其顯靈之若
是中前敵人叛盟意欲長驅而下蜀至此而爲官軍
所敗寧知非陰護之所致耶敢不敬書

張子忠

乾道八年十一月望日

李德刊 石匠尹暉

同谷米居純記

緣化主職醫魏奎

鞏州天慶觀授業道士王致修小師嚴居厚雲水道人員居顯李冲和

武功大夫興州駐劄御前右軍統制軍馬知西和州軍州兼管內勸農事沿邊都巡檢使彈壓軍馬王光祖立石